

# ロシア・ソヴェト全国書誌『図書週報』 をめぐって（1907—1920）上

小林清美<sup>\*</sup>

ロシア19世紀80年代おわり、チェーホフは『わびしい話』を書いていた。功なり名遂げた老教授に養女カーチャは問う、「もうこんなふう生きてゆけない。あたしはどうすればいいの？」チェーホフは老教授に「わからない」とくり返させる。そんな時代であった。

同じころペテルブルグのプブリーツィナヤ図書館（いまのサルティコフ＝シチェドリン図書館）に通ってくる男がいた。彼はロシア文化史集成ともいうべき古代から現代までの作家学者伝記辞典にとりくむ過程で図書総目録のない不便さをひしひしと感じ、1725年以降の図書総目録づくりにいまとりかかっていた。正確と完全を期して納本保存館であるプブリーツィナヤ図書館の現物からカードを作成しているのだ。数年後この仕事は終わった。独力であった。彼の名はS・ベンゲーロフ、ナロードニキとして当時警察の監視下にあった<sup>1)</sup>。

やはり同じころ、ところかわってチェーホフの住むモスクワのニコリスキー門ちかくに『地下室』という飲食店があった。大きな古本屋アスタポフの店の常連のたまり場であった。あるときひとりのひげ面の男が大きな声でしゃべっていた。ロシアの図書総目録のためすでにひとりで2万タイトルのカードを作成したが、もうどうにも金銭的にゆきづまってしまった。協力してほしいというのだ。ゴチュー書店に勤めるこのフレイマンの提案に協力を申出た男がいた。パリの図書展示会から戻り、その足でここにやって来たA・トーロポフである<sup>2)</sup>。彼はフレイマンの提案をほかの常連たちにも呼びかけ、きっと実現させようと決心していた。

ベンゲーロフとトーロポフ。このふたりは28年後1917年2月革命のあと出版管理局撤廃特別委員会のメンバーとしてともに働く。トーロポフは出版管理局の全国書誌『図書週報』の創刊からの編集長である。ベンゲーロフは名声高きプーシキン学者、ペテルブルグ大学教授、経験豊かな書誌家。やがてこの委員会の審議をもとに

\* こばやし きよみ 一橋大学経済研究所

1) Калентьева А. [8] p. 39-42. ([ ] は15ページ参考文献の番号)  
2) Рейсер С. [6] p. 294-295.

臨時革命政府の学術的書誌機関「図書院」の院長となり、トーロポフたちと『図書週報』の刊行をつづける。

二月革命はこの「筋金入りナロードニキ」の信念の正しさのあかしであった。三たび試み、途中で断念しなければならなかった畢生の事業『ロシア作家学者伝記辞典』も新しい国家の援助のもとにかならず完成させよう。ベンゲーロフにとって二月革命は収穫の秋を約束しているようにみえた。

だが……

## I ロシア全国書誌『図書週報』の創刊

19世紀末から今世紀はじめにかけて西ヨーロッパの書誌界では新刊図書登録誌と新刊図書の保存の問題が先鋭化していた。その背景には印刷技術の進歩にとまなう出版物の激増があった。書誌家たちは新刊図書の納本制度の法制化を国家に求めている。ロシアの書誌界図書館界もおなじ動きをみせている。

当時ロシアの国家の新刊登録誌は1869年から危険文書取締りの総本山内務省出版管理局の手になる『官報』に「ロシア出版物リスト」の欄があった。だが収録の不完全、誤りの多い記述、遅刊などで実質的には情報誌として役立たなかった。19世紀後半世紀書誌界、出版界でも新刊収録誌の試みがいくつかされたがすべて失敗におわっている。（トーロポフも1894年～1896年モスクワ書誌学サークルの機関誌で試みている。）

1895年著名な書誌家N・リソフスキーがロシア印刷事業活動家協会第一回大会で新刊収録誌の必要性を訴え、この問題のロシアでの審議の口火をきった。数々の審議の結果学士院に印刷物の登録整備と図書館への的確な送付に関する委員会がつけられた。メンバーは学士院、プブリーツィナヤ図書館、学士院附属国際書誌ビューロー、ロシア印刷事業活動家協会、ロシア文献学協会（ベンゲーロフはこの会員である）の代表12名、政府側から内務省2名宗務院1名——計15名で構成され、会長には学士院のN・ドゥブロービンがなった<sup>3)</sup>。

委員会は現状を分析し、『官報』の「出版物リスト」はまったく不十分であり、著者件名索引をもつ学術的登録誌が必要である。「出版物の性格に関する情報のみを必要とする」出版管理局では学術的登録誌はつくれないとし、文部省の管轄下に月刊の新刊登録誌を作成する特別の常設委員会をプブリーツィナヤ図書館に設立する案がまとまった。プブリーツィナヤ図書館の義務納本を利用しようというのである。1901年に規定がつくられ、文部省に請願、大蔵省に予算請求された。委員会と

---

3) 彼の死後は、やはり学士院のS・オリヂェンブルク。

役所のあいだで長いやりとりが交された。結局決定は宮内大臣フレデリクス、内務大臣プレーヴェ、宗務院長ポベドノスツェフの三者に委ねられることになった。前二者は異議をとくなえなかったが、ポベドノスツェフがそういう仕事は役所ではなく、企業が学者組織がやるべきであると反対。1904年末これにもとづいて文部省もこの計画を拒否、計画はご破算となった。

一方『官報』の「出版物リスト」欄はこうした動きを背景に1902年2月号を最後に（この号は1903年10月に出版された）、1903年から『官報』より独立した。しかし1903年の新刊リストは1905年に出版され、1904年からなされた季刊の試みも1号だけというはかばかしくない状態だった<sup>4)</sup>。

次に委員会は1905年5月出版管理局内に新刊登録のための委員会設置案を管理局に提出、拒否された。さらに印刷に関する新しい法令作成にたずさわっている「特別協議会」（議長プブリーツィナヤ図書館長D・コベコ）に新刊登録の審議と実現のための委員会組織計画を送付するなど、あらゆる機会を利用して努力したが、成果はみられなかった<sup>5)</sup>。

委員会の動き以外にもロシア文学協会のE・ヴォルテールらが管理局に計画を送付している。

そして1905年革命が起った。

10月ペテルブルグ労働者代表ソヴェトは決議。「検閲委員会を無視し、検閲へ送付しない編集者の新聞にかぎり出版することができる…… この決議に従わない新聞は売子のところで差押え、廃棄され、印刷所、機械は破壊される……」

実質的に出版の自由が獲得された。レーニンによれば「検閲制はあっさり押しつけられた。もう出版所は官憲にあえて納本しなかったし、いっぽう官憲もこれにあえて干渉しなかった。ペテルブルグその他の都市で革命的新聞が自由に発行された。」<sup>6)</sup>となる。

革命期間中に350以上の出版社ができ、おもに社会科学、あれこれの党文献、非合法文献が出版された。それら革命文献・パンフレット類はひっぱりだこで、商人の投機の対象になるほどだった。この「ロシアの出版のハネムーンの日々」（ベンゲーロフ）に「松明」出版所からベンゲーロフはそれまで許されなかった一連の社会政治思想関係の資料を刊行した。ペリンスキーの『ゴゴリへの手紙』もそのひとつである。ロシアではじめての刊行であった。

4) 4月から1906年分までは甚しい遅刊をともなって月刊で出版された。1907年前半期はトロポフが『図書通報』の仕事のかたわら手がけ、1908年に出した。

5) 委員会の活動については Машкова М. [1] によった。

11月24日『定期刊行物に関する臨時措置』によって法的にも定期刊行物の事前検閲は廃止された。1906年4月定刊以外についても廃止された<sup>7)</sup>。これにともなって検閲委員会は出版委員会、検閲官は出版検査官と名称をかえた。

1906年3月31日ウィツテ首相のニコライ三世への報告に対し年間15万ルーブルの国庫金が支出された。これは以後政治的監視活動のための特別ファンドとして政府側の雑誌・図書への援助などに使われた。その翌日出版管理局長A・ベリガルドは内相ドゥルノヴォにつきのような報告をした。新刊印刷物の登録と図書館への供給の問題解決のため新刊の全印刷物を管理局へ集中する。これは印刷物に対するコントロールと出版界等の社会的要求に答えるためである。そのため管理局に専門図書館を設置する。そこには各地方の検査官からロシア国内で出版された全印刷物が義務納本として規定の部数送付されてくる。そのさい検査官は必要事項(著者、書名、出版事項、ページ数、大きさ、出版部数のほか、検査官名、印刷所の住所)をカードに記入し、納本と一緒に送付。専門図書館ではこのカードを利用して、ロシアで出版された全印刷物を収録する週刊の書誌雑誌を刊行する。図書館にはカード目録をそなえ、また納本された印刷物を一部一年間保管する。それ以外の部数は定められた保存図書館に供給する。

ベリガルドはさっそく学士院の委員会にでかけ、社会的要請に答えた、書誌界の要望を上まわる文化的大事業として報告した。委員会のメンバーもこの計画を歓迎した。

4月にウィツテは退陣し、ゴレムィキンが首相となる。7月ゴレムィキンにかわりストルィビンの登場。その一年後の1907年7月14日(旧歴)ロシア全国書誌『図書週報』は創刊号をだした。計画から創刊までの経過である。

ソ連の研究者は革命前の『図書週報』をはじめ出版管理局の手になる全国書誌とみなしていたようである<sup>8)</sup>が、その後アルヒーフやマヌクリプトの調査によって1905年革命の事前検閲制廃止にかわる新たな出版物監視対策のひとつとして位置づけられるようになる<sup>9)</sup>。

もっとも詳細に創刊のいきさつをのべているM・マシコヴァとM・ソクーロヴァの『『図書週報』創刊の歴史から』(参考文献〔1〕)はその根拠として以下の4点をあげている。

1. 1906年3月30日ウィツテの報告に対し支出された異例の年間15万ルーブルの

---

6) レーニン [11] p.272.

7) この法律は1917年2月革命まで存続した。

8) Масанов Ю. [3] p. 27-28.

9) Машкова М. и Сокурова М. [1], Дернова М. [4] p. 6. [5] p. 179.

国庫金から専門図書館および『図書通報』の費用がまかなわれた。2. ベリガルドの報告には本当の動機（出版物監視）はのべられていないが、1913年ベリガルドの後任タチシェフの内務大臣への報告「非定期刊物の事前検閲の廃止と著しく変化した図書出版所と図書印刷の条件は出版管理局の活動強化を惹起し、その結果管理局はコントロール強化とロシアの図書事業と定期刊行物印刷の状況を判断できる厳格な報告書の必要性を認めたのである。この目的で管理局において1906年（1907年—マシコヴァ、ソクローヴァ）から『図書週報』が出版された。」3. 検閲廃止にともない短期間で差押えから印刷所、書店閉鎖までの出版物監視システムがつくりだされ、1905年11月24日から1906年2月1日までで印刷物に対する裁判は1000件を越えていた。4. 創刊後『図書週報』は無料で県知事、出版委員会、検査官に送付され、出版物監視担当機関、人物にとって不可欠のものとなった。2号からは販売停止図書のリスト、5号からは出版無効、差押えと取消しに関する裁判所、出版委員会決定表が掲載されたこと。以上である。

『図書週報』が出版物監視対策として創刊されたことは確かであると思う。しかし『図書週報』は創刊後同時代の書誌家によって、また現代のソ連においてもすぐれた全国書誌として認められ<sup>10)</sup>、それは編集長トーロポフの功績であるとされている。たしかにトーロポフはあとでのべるように『図書週報』をすぐれた全国書誌にするためにできる限りのことをした。しかし書誌は書誌でも全国書誌となると個人の力ではどうにもならない部分が多い。『図書週報』がすぐれた全国書誌であったなら、第一の根拠はその義務納本システムにあると思う。ロシア全土の義務納本を添付カードと一緒に集中させる管理局の専門図書館、添付カードを利用した『図書週報』刊行、利用の便宜を考慮した索引システム、保存図書館への納本の送付。

「定められた秩序は当時として書誌の最大限の完全性、書誌記述の正確さと統一を保証していた。」とマシコヴァは書いている<sup>11)</sup>。この計画は目的を別にすれば学士院の委員会の要望以上の内容をもっている。管理局の出版物監視対策のみで片づけきれない、書誌界の意図も確実に見てとれるのである。

また政府の上層部がこれを有効な監視対策と判断したかどうかも疑問である。書誌家のN・コロレフは1915年雑誌『図書館員』に全国書誌についてつぎのように書いている。「このような事業への国庫金からの援助については残念ながら語るにも

10) 当時書誌界においてももっとも先鋭的存在であった唯物論的ナロードニキ、元「人民の意志」党員 K. チェルノーフは論文「書誌の死活の問題」（1913）のなかで、登録誌以外の散漫さを批判しながらも、「それでもやはり『図書週報』はわが国の書誌雑誌のもっとも価値ある成果である」と評価している。ソ連でも参考文献[2][3][4][5]において評価されている。

11) Машкова М. [2] p. 47.

あたらない。というのは『図書週報』は役所の出版物ではあるが、内務省のにくらしいまま娘なのである；この出版物はあるべき水準から遠くへだっている、なんとすればそれは支出される資金がとるに足りないからである。』<sup>12)</sup>『図書週報』の財源は1903年ウィツテの報告に支出された機密ファンドで出版されていたので、「この雑誌の財政状態はあてになるものでも保証されたものでもなかった。」<sup>13)</sup> 1903年3月のペリガルドの報告でも費用はあまりかからないことわっている。また編集部スタッフは10年間をつうじてわずか3～5人であり<sup>14)</sup>、編集長トーロポフが「休日なしで日に16時間以上」働かなければならなかったゆえんである。上層部が有効な出版物監視対策ととらえていたらこうした事態にはならなかったのではないか。出版物監視対策としては1906年末から従来の禁本リスト『裁判機関で差押えが確定した図書・パンフレットのアルファベット順目録』が続々と刊行され、当座の出版物監視対策には不自由はなかったと思われる。

そうした状況のもとでどのように、いかなる人物によって全国書誌の計画がつくられたのだろうか。管理局長ペリガルドは計画当初から創刊後も『図書週報』を学術的にも価値のある書誌雑誌にしようとの意向をもち、反動化を強める管理局でこの意向は歓迎されなかったという<sup>15)</sup>。全国書誌を出版物監視対策として計画、提案したのはペリガルドであろう。しかし彼の経歴は市警察長官室出身であるというから、「書誌の最大限の完全性、書誌記述の正確さと統一を保証」するシステムを考えだしたのは彼ではないと思われる。計画には書誌学に造詣の深い人物が加わっていたはずである。それはだれだったのか。現在までのソ連の研究ではなにものべていない。

## II 『図書週報』編集長トーロポフ

アンドレイ、ドミートリエヴィッチ、トーロポフ、55歳。  
ここにいたるまでの足跡をたどってみよう。

1851年うまれ。おおよそ10歳うえにはピーサレフ、ミハイロフスキー、クロボトキンら多彩な社会思想家、革命家がいる。10歳したにはチェーホフがいる。同世代といったら2歳したのコロレンコだろうか。

父はヤロスラーヴリ市で県の役所に勤めていた。貴族であったようだ。子供のこ

---

12) Масанов Ю. [3] p. 29.

13) Машкова М. [2] p. 54.

14) Рейсер С. [6] p. 373.

15) Машкова М. [2] p. 49.

ろから本が好きだった。ヤロスラーヴリの法律貴族学校に在学中、家族がモスクワに移ったので、モスクワ大学法学部に転校、1876年に卒業した。モスクワ管区裁判所と船舶局に二年つとめたあと役人生活をやめた。「本への情熱を捨てきれずに」とマサノフのトーロポフ伝（参考文献〔3〕）にはある。それから恵まれない家庭の子供たちを対象にしたモスクワではじめての一般公開の児童図書館を開設した。40年の活動の出発である。すぐに良書普及協会の印刷所主任となった。やがて書誌の作成も手がける。そうしたなかで書誌家、愛書家たちとの交流をひろげ、国の内外の文献学の見識を深めていった<sup>16)</sup>。

当時ロシア書誌界は書誌事業の組織化が大きな課題であり、その必要性が叫ばれていた。モスクワの飲食店『地下室』でこの課題は実現された。フレイマンの国書総目録作成に協力を約束した11人が結成したモスクワ書誌学サークルがそれである。トーロポフは初代会長となった。

サークルの目的はトーロポフがイニシアティブをとってつぎのように決められた<sup>17)</sup>。

1. a ロシア図書とマヌスクリプトの研究と記録
- b 書誌のシステムと方法ならびに図書に関する技術的知識の普及
2. a ロシアの書誌に関する資料の収集、その組織化、定期的カタログの発刊
- b 書誌図書館の結集
- c 書誌ミュージアムの創設
- d 書誌関係の無料読書室の開放と展示
- e 図書館員との共同作業と書誌分野での助力
- f 個人文庫への補助

わずかに11人のメンバーのサークルにしては遠大な目的だが、トーロポフはサークルをやがてはロシア書誌界のセンターにしたいと思っていた。事実それに近い組織になってゆく。発足当初のメンバーは学者、本屋、愛書家などであった。フレイマンは本屋をバックにレトロスペクティブな全国書誌作成を目指したのに対し、トーロポフは学者をバックにカレントな全国書誌を目指した。

サークルは公刊されている書誌を利用してフレイマンの仕事すすめた。一年後には6万7千タイトルを数えた。その過程で記述法と書誌の書誌の必要性が痛感された。

トーロポフは「不完全で混乱した記述は完成した仕事をまったく無意味にする」

16) Масанов Ю. [3] p. 4-5.

17) モスクワ書誌学サークルの活動については Choldin M. [10] によった。

として記述法に積極的にとりくんだ。ほかのメンバーと12回の会議をかさね、『図書記述の方法』（1891）をだした。10年後『詳細な記述指導のこころみ』<sup>18)</sup>を出版し、記述法の一人者となる。それは西欧の記述法をモデルとする、タイトルページにある事項の「フォトグラフィカルな写し」であった。今からみれば不十分なものではあるが、記述法の標準化を目指している点で大きな意味をもっていた<sup>19)</sup>。

書誌の書誌については1900年『ロシア書誌の文献』（100カード、24部）をだした。

トーロポフは実務家タイプの書誌家である。彼の著作目録<sup>20)</sup>をみると記述法、書誌、索引をのぞくと編集者としての無記名記事、報告などがほとんどである。実務への関心、自分の仕事への情熱、実行力、勤勉さ。ロシア人の描くドイツ人のイメージである。

トーロポフは初代会長として実に意欲的に仕事をし、守備範囲もひろかった。同時代の書誌家よりも西欧を強く意識していた。会長になるまえに何度かでかけ、西ヨーロッパ書誌界との接触もあったようだ。サークルの憲章、活動報告をみずから英独仏語に翻訳し、各国へ発送し、会員まで募った。1894年にはサークル代表としてパリの図書展示会に出席し、〈A La Société Bibliographique de Moscou〉と刻まれたブロンズメダルを授与されている。1900年にはドイツのマインツで催されたグーテンベルグ記念祭でロシアからの客人として花束をうけている。1900年会長をしりぞいた（同年サークルはモスクワ大学附属書誌学協会となる）のちも協会と西ヨーロッパの橋わたし役を勤めた。

アメリカの研究者チャールデンは1894年のメダル授与について「フランスの同僚によるこの表彰は一般的に西欧からの孤立と無視を感じてきたロシア人たちに非常な満足を与えたにちがいない」としている<sup>21)</sup>。「ほかのいくつかの分野とおなじように書誌学においてもロシア人の西欧に関する劣等感はいよいよ大きくなった」（N・バクロフスキー）からである<sup>22)</sup>。先進の西欧文明をどう受入れるかにおける相剋は後進の国にとって宿命である。トーロポフにとって西欧書誌界はメルクマールであった。メルクマールからの無視と孤立を彼も感じていた。だがそれは手のとどかない所にあるのではない。やがては自分（ロシア）も仲間入りすべき所なのである。そこで論議されている問題はロシアでも問題となるはずのものだ。19世紀後

---

18) 《Опыт руководства к подробному описанию книг, согласно требованиям современной библиографии》 М., изд. В. Ф. Фреймана. 1901. 92 с.

19) Масанов Ю. [3] p. 16.

20) 同上 p. 37-44.

21) Choldin M. [10] p. 6.

22) Choldin M. [10] p. 3.



半西ヨーロッパ書誌界で論議の中心であったカレント全国書誌の問題はトーロポフにとっても最大の関心事であった。

1894年サークルは月刊機関誌『図書学』を創刊した。編集長として彼は「編集部より」と題した創刊の辞を書いている<sup>23)</sup>。ロシア書誌界の旧習、自己流、無秩序を修練、規律、システムへと早急にかえる中心となるのが雑誌の使命であるとし、書誌、図書館、出版、印刷の4部門を設けている。書誌部門では理論的、実際的問題の審議と新刊図書リストを筆頭とする書誌情報が課題とされている。その新刊図書リストについてトーロポフはこう書いている。最大の難関は新刊図書の月刊カタログである。完全にして最新のカタログ提供をしたいが、新刊図書のしかるべき法律による登録システムのないロシアでは書誌情報は大体の推定でしかない、と。限界をしりながらの「完全、迅速」を目指しての新刊図書リストの試みであった。

予告どおり書誌部門には、

- 新刊図書リスト
- 主要雑誌のコンテンツリスト
- 新刊図書の書評
- 数種の新聞のコンテンツ
- 禁本リスト<sup>24)</sup>
- カレントな情報に役立つ書誌資料

がずっと掲載された。そのほか作家、書誌家、学者の著作目録などもあった。

実現はしなかったが印刷カードの予約募集もされた。トーロポフは編集のほか新刊図書リスト、ロシア作家書誌家著作目録などをおもに担当した。

『図書学』は1896年サークルを破産寸前に追いこんで閉刊した。民間機関によるカレント全国書誌の試み挫折の一ページである。

サークルの財政は会費と篤志家の援助でまかなわれていたので、サークルの活動には限りがあり、当初の目的ほど活動できなかった。しかし会員は10年間で124名になり、ロシア書誌界を支える組織としての土台はある程度できた<sup>25)</sup>。トーロポフは会長の任をよく果した。

1900年サークルはモスクワ大学附属ロシア書誌学協会となった。会長は大学の伝統によって教授がなることになっていたのに、トーロポフは退き、ロシア屈指のコレクター、『ウリヤニンスキー文庫』で名をしられるモスクワ大学教授D・ウリヤ

---

23) Рейсер С. [6] p. 351-362.

24) 禁本リストを掲載しているが、もちろん出版監視のためではない。書誌情報として必要とされていたのだろう。

25) ベテルブルグには1899年ロシア文学協会ができた。

ニンスキーが会長となった<sup>26)</sup>。

創立当初の目的である図書総目録は最終的にカード30万枚になった。アルファベット順排列から10進分類排列への訂正（これも当時の西ヨーロッパ、とくにブリュッセルの書誌研究所の世界書誌づくりなどの関連があると思われる）、またカードと実物のチェックがとうていサークルの手にある仕事だったことなどでついに実現しなかった。

トーロポフはそのあととも会員として、とくに西ヨーロッパと協会の橋渡し役として活動した。だが1901年以後は当時人気のあった週刊誌『ニュー』の索引づくりや新聞の編集が主だった仕事になる。（『ニュー』はチェーホフの全集を出版したペテルブルグのマルクス出版社からでていた。）『ニュー』は文学作品、絵画、彫刻などの複製画を収め、索引づくりは困難が予想された。しかしトーロポフは『『ニュー』誌30年間（1870—1899）の文学と芸術的内容のシステムティック索引』（ペテルブルグ、1900）を作成<sup>27)</sup>。いまでも価値を失っていない。

そして『図書週報』の編集長となる。「出版管理局は『図書週報』に適当な編集長を探し、A・D・トーロポフを選び出した。彼はこの仕事につくときはもう若くはなく、信念ある円熟した人物であった。書誌家たちのあいだで名を知られ、権威があった。モスクワ書誌学サークルの目録の実地経験を総括したはじめての専門的な『詳細な記述指導のこころみ』（モスクワ、1901）をふくむ一連の仕事が彼の手になっていた。トーロポフは書誌家、編集者、組織者として少なからぬ経験をもっており、委員会と検査官から入ってくる情報を任せることができた。彼の政治信念は疑いをひき起さず、まったく思想穏健であった。出版管理局は責任ある仕事をトーロポフにゆだね、全面的に信頼していた。』<sup>28)</sup> とマーシコヴァとソクーロヴァの論文にはある。書誌界で権威あるトーロポフが、1906年4月学士院の委員会でペリガルドによって報告され、歓迎された全国書誌雑誌の編集長になるといえばちょっとしたニュースだったろう。しかし出版界の雑誌『図書通報』は出版界、書誌界、文壇などの小さな出来事もいつもならすぐとりあげるのに『図書週報』創刊については報道しなかった。マーシコヴァらは検閲機関のための官庁出版物とみられていたからとしている<sup>29)</sup>。それにしてもトーロポフがそうした性格の出版物の編集長に

26) マーシコヴァは彼の会長就任によって、協会は著しくビブリオフィーリックの傾向をつよめ、全国書誌をはじめとする当初の目的から後退していったとする。ウリヤニンスキーらは稀こう本の収集、保存に熱中し、本崇拜におちいったと敵しい。しかしアメリカのチャールズ・ディンズは彼を高く評価している。またソ連でも1979.8.24付の『クニージノエ アバズレニエ』では彼の再評価がされている。

27) 続きは1906年に出版された。

28) Машкова М., Сокурова М. [1] p. 20.

29) Машкова М., Сокурова М. [1] p. 19.

なることが知られていれば記事になったはずである。内密にされていたのだろうか。なんらかの理由があったと推測されるが、トーロポフの裁判事件は理由のひとつかもしれない。

トーロポフは1905年12月編集をしていた新聞『クバーン』に彼の許可を得ず、秘かに印刷、撤かれた革命檄文の件で逮捕された。翌1906年6月ふたたび出版者兼編集者であった新聞『クバーンスカヤ・ジーズニ』の「ペロストークの虐殺」という記事の責任を問われて裁判にかけられ、裁判は数年にわたった。マーシコヴァは裁判にかけられ逮捕すらされたのに編集長に選ばれるほど管理局は彼の政治思想に信頼をおいていたとしている<sup>30)</sup>。しかし同じページに、トーロポフは裁判によって内務省役人として面子を傷つけられ、1908年11月に退官し自由契約<sup>31)</sup>になったのは裁判の件でエカテリノダール地区裁判所から管理局へ問合せがあったからだろうとしている<sup>32)</sup>。だが問合せによって退官しなければならなかったなら、いくら「思想健康」でも逮捕、裁判にかけられている人物が『図書週報』の編集長にはなれなかったろう。(したがって「全面的に信頼されていた」という表現は正確ではないと思う。) こうした事情もあってトーロポフ編集長の線が公表されなかったとも考えられる。またトーロポフが『図書週報』誌上の編集者名記載に反対した<sup>33)</sup>のはなぜかなど、『図書週報』創刊のいきさつについては現段階ではわからない部分が多い。

「当時として書誌の最大限の完全性、書誌記述の正確さと統一を保証」<sup>34)</sup>する全国書誌の計画に加わった、書誌記述に造詣の深い人物がトーロポフであった可能性も充分考えられるが、いまは想像の域を出ない。

なににせよ編集長となった彼は「『図書週報』の学術的、文化的意義を理解し、印刷物の完全かつ正確な登録確保のためになしうるすべてをし、それを書誌学的文献学的雑誌にかえよう」と目指した。<sup>35)</sup>

### III 1917年2月革命までの『図書週報』

『図書週報』は1907年7月14日(旧暦)第1号をだした。

---

30) Машкова М. [2] p. 48.

31) Масанов Ю. [3] でははじめから自由契約であったとし、トーロポフが管理局と一線を画するためであるとしている。しかしこの研究はマーシコヴァの[2]より18年前に出版されており、マーシコヴァがこの事実を確かめなかったはずはないから、1908年11月退官、自由契約が正しいと思う。

32) Машкова М. [2] p. 48.

33) Масанов Ю. [3] p. 24.

34) Машкова М. [2] p. 47.

35) Библиография. [5] p. 181.

そこにはつぎのように記されている。

出版管理局書誌部—ロシアで新しく出版されたすべての図書の義務納本の集中的受入と国の図書保存館への供給はここに属している—はこの7月14日に図書登録の新しいシステムを実施した。この登録の結果は毎週『出版管理局図書週報』に公表される。この方法によって図書に関心をもつすべてのひとに全書刊書の完全なリストばかりでなく、学術的実的要求を満足させる全書刊書の詳細な書誌記述をタイムリーに与えると同時に、以下の計画にしたがって出版される。

#### I. 週刊

1. a. ロシアで印刷されたあらゆる言語の全図書のアルファベット順目録  
b. 件名索引
2. a. 若干のロシア語雑誌、新聞のすぐれた論文の索引  
b. 新刊図書の書評目録  
c. 図書印刷、図書販売に関連するさまざまなニュース  
d. 通告

#### II. 季刊

- a. 三ヶ月間の著者名索引
- b. 三ヶ月間の件名索引
- c. ロシア語からの翻訳索引
- d. 論説

#### III. 年刊

著者名、件名の年間索引

このほかに来年一月から外国で出版されたロシアに関連のある図書目録を掲載する《Rossica》の項と外国で出版されたスラヴ語の図書目録《Slavica》の項を加える予定である。

つぎに値段と予約法が書いてある。

トーロポフの意気込みが通ってくるようだ。13年まえの『図書学』の創刊の辞とくらべてほしい。「第一の難関は新刊図書の月刊カタログである。完全にして最新カタログ提供をしたいと考えるが、印刷出版された図書のしかるべき法律による登録システムのないロシアにあって書誌情報はおよその推定でしかない。」いま登録システムはひかれた。「完全にして最新カタログ」は『図書週報』として実現した。ロシアの書誌の土台はできた。トーロポフは全力でとりくんだにちがいない。

ない。

第1号の新刊リストに目をとおすと、ゴーリキー『母』、ベレサーエフ『戦争で』、ガーリン『技師たち』を収めた『《ズナーニエ》社1907年作品集18』、ブリューソフ、ソログロフの詩などのはいった『戦争あとの回想、戦時社会論文集』、A・トルストイ『全詩集』、L・トルストイ『なんのために？』、シェークスピア『オセロ』などがある。

記述は著者、書名、副書名（非常に詳しい）、出版地、出版年、出版社または出版者（住所）、印刷所（住所）、大きさ、ページ数、発行部数、価格、重さ。またうしろの著者索引には論文著者もいれてある。そのあとに件名索引、1906年ベテルブルグの印刷所、出版所、本屋、図書館の数がのせてある。

反動化を強めるポベドノスツェフ政府のもとでトーロポフとベリカルドが目指す学術的にも価値のある書誌雑誌は厳しい状況にあった。さきにものべたようにスタッフは3～5人、これは1917年までかわらなかった。1907年10月トーロポフは書く。「この間私はひとりて『図書週報』を作成していたものですから、たいへん忙しかったというわけです。一週間に300～600冊の目録をとり、索引づくり、校正、それから図書館がきちんとしているか監督するのは休日なしで1日16時間以上かかります」（書誌家A・スミルノフ宛）<sup>36)</sup>

結局『図書週報』には創刊から1917年2月革命までにロシアで出版された約266,000タイトルの図書、パンフレット、地図、楽譜、定期刊行物が収録された。著者名、件名索引は各号と年2回（1907—1909は季刊）掲載され、分類索引が年1回だされた。

時期によって書評、翻訳リストが掲載されたが、『Slavica』は実現せず、『Rosica』も日露戦争、革命にかんする文献が多かったことから1908—1909年だけで中止させられた。

《すぐれた論文索引》では政府側の反動的な新聞が選択されたため批難的となった。これは元「人民の意志」党首領の転向者、「正教の柱、専制君主政体の擁護者」（V・フィグネル）L・チホミーロフの選択によって管理局図書館のI・マカレフスキーが作成したものだった。トーロポフの要求によって1914年に廃止された。

差押えおよび没収印刷物にかんする政府決定と禁本リストは毎年発行される禁本目録『裁判機関で差押えが確定した図書、パンフレットアルファベット順目録』よりも完全、詳細だった。目録にはない「いかなる機関が、いつ、どこで差押えた

---

36) Машкова М., Сокурова М. [1] p. 20-21.

か」の記載があった。迅速さとわかりやすさは図書出版、販売監視機関に役立った。1914年から禁本にかんする公式の典拠となった。

『図書週報』が全国書誌としてすぐれているのは、1. 収録が比較的完全であること、2. 記述の一貫性、3. 熟考されたシステムにもとづく索引、4. 遅刊のないこと。

欠点として指摘されているのは、1. 種々雑多な資料がアルファベット順に排列されている、2. 重複記載が多い、3. 官庁資料、革命文献に収録もれが多い、4. 発行部数が少く（創刊時1,200部、その後もあまり増刷されなかったらしい）、官庁経路による販売。

全国書誌としての条件はまずまずみたしているといえると思う。以前の『出版物リスト』はもちろんほかの国の全国書誌とくらべてもすぐれていた。トーロポフは編集長になってからも毎年西ヨーロッパにでかけていた。1908年ベルリンの書籍商大会に参加したさい、ドイツの全国書誌の実情を身近に知り、『図書週報』はその義務納本システムによって収録の完全さ、記述の詳細さの点で「西ヨーロッパのまえでさえ」優越点をもつとベリガルドに報告している<sup>37)</sup>。（収録率については出版監視目的と結びついたためにおそらくは学術機関が担当したより完全に近くなったろう。全国書誌の収録率を出版の自由との関連で問題にする場合完全さが必ずしもよしといえないゆえんである。もちろんトーロポフは収録率が完全なほどすぐれた全国書誌であると考えていた。）

書誌界にとって『図書通報』の情報源としての意義は大きかった。たしかにロシア書誌事業の土台をつくったといえる。書誌家たちは種々の書誌作業の基礎として利用した。なかでもI・ヴラジスラーヴレフの『出版年鑑1910—1914』は代表的なものである。これはカレントな出版年鑑に推せん書誌の機能をプラスしたブラジスラーヴレフの考えだした新しいタイプの書誌である。

トーロポフはロシア文献学協会などにたびたびでかけ、『図書週報』の現状について報告し、問題点を審議にかけた。『図書週報』をすぐれた全国書誌にするために実に精力的に動いている。

また1908—1915年の図書と定期刊行物の統計年鑑をほとんど独力でだし、この間の出版事業にかんする信用できる資料として今日も価値がある。また革命後図書展示の講義をしているようにこの道の知識があり、管理局でも毎年その年度のロシア出版物の展示会を催している。

1917年2月革命によって出版管理局は解体される。トーロポフはベンゲーロフら

---

37) Машкова М., Сокурова М. [1] p. 21.

とともに出版管理局撤廃特別委員会のメンバーとなる。『図書週報』は2月25日付 No. 8 が管理局で発行された最後のものとなる。だが3月30日付で No. 9/10 がだされ、その後も発行されつづける。7月8日付 No. 27 に臨時革命政府の書誌機関である「図書院」の表示がされたあと、また10月革命後もトーロポフは編集者としてときにV・ブッシュ、院長ベンゲーロフとともに名をつらねている。1920年まで『図書週報』は図書院で発行され、以後モスクワにソヴェト政権によって創設されたロシア中央図書院に移管される<sup>38)</sup>。10月革命からロシア中央図書院移管までの困難な情況での『図書週報』づくりはベンゲーロフを中心に次回に書くつもりである。

1920年以後トーロポフはレニングラード図書学研究所で図書ミュージアムの組織化、図書展示の講義などをした。1926年舌ガンと咽喉ガンに犯され、1927年書誌活動をはじめた地モスクワへ戻り、その生涯をおえた<sup>39)</sup>。折しも唯物弁証法的書誌学がやかましく叫ばれたときであった。

(未完)

#### 参考文献

- [1] Машкова М. В. и Сокурова М. В. Из истории возникновения «Книжной летописи». («Советская библиография» вып. 47 (1957). с. 11–22)
- [2] Машкова М. В. История русской библиографии начала XX века (до октября 1917 года). М., Книга, 1969. 492 с.
- [3] Масанов Ю. А. А. Д. Торопов (1851–1927). Краткий очерк жизни и деятельности. М., Всесоюзная книжная палата, 1951. 50 с. (Серия «Деятели книги»)
- [4] Дерунова М. К. Пятьдесят лет «Книжной летописи». («Советская библиография» вып. 47 (1951). с. 3–19)
- [5] Библиография. Общий курс. Учебник. Под ред. М. А. Брискмана и А. Д. Эйхенгольца. М., Книга, 1969. 560 с.
- [6] Рейсер С. А. Хрестоматия по русской библиографии с XIX века по 1917 г. М., Госкультпросветиздат, 1956. 447 с.
- [7] Шамурин Е. И. Всесоюзная книжная палата и развитие советской государственной библиографии (1917–1945 годы). (Сорок лет советской государственной библиографии (1920–1960). Сборник статей. М., 1960. с. 10–61)
- [8] Калентьева А. Г. Влюбленный в литературу. Очерк жизни и деятельности

---

38) ロシア中央図書院は1925年連邦共和国中央図書院、1936年全ソ図書院となって『図書週報』を刊行し、今日に至っている。

39) Масанов Ю. [3] p. 34.

С. А. Венгерова (1855-1920). М., Книга, 1964. 80 с. (Серия «Деятели книги»).

(9) Книжная летопись, 1907, 1917. Vadus, Kraus Reprint, 1964.

(10) Choldin M. T. The Russian Bibliographical Society : 1889-1930. («The Library Quarterly» vol. 46, no. 1 (Jan. 1976). p. 1-19.

(11) レーニン全集23巻, 大月書店, 1957.

# bind-quick BQ-18

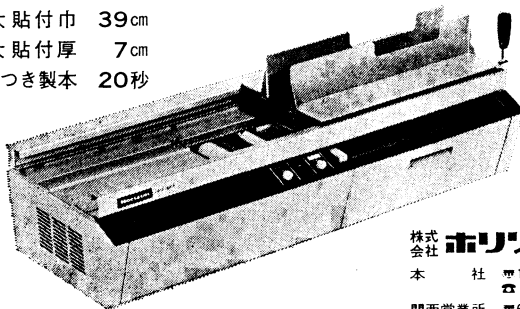
バインドクイック

## 卓上自動製本機

雑誌の合冊製本に

《仕様》

最大貼付巾 39cm  
最大貼付厚 7cm  
表紙つき製本 20秒



図書館・資料室・研究室に

- 無線とじでコピーが簡単
- 卒論・修論の製本に
- コピーの製本に
- 表紙付製本が35円



¥415,000

株式会社 **ホリゾン**

本社 ☎160 東京都新宿区番衆町31  
☎03 (354) 0558 (代表)

関西営業所 ☎601 京都市南区久世大蔵町510  
☎075 (933) 3060 (代表)